

## やきもち さきちゃん

\*\*\*\*\*

「ふう」

最後のパンを棚においたところで、思わずため息出ちゃった。毎朝これやってるんだから、お母さんも大変だよ。

「あつーい」

レジの近くのイスに腰かけてエプロンぱたぱた扇いでも、まだ外より暑い感じだよ。店じゅう焼きたてパンでいっぱいなんだから、しかたないけどさ。

「おいおい、お客さんの前ではやめてくれよ」

ってお父さんの声。いつしよに、なんか飛んできて。キャッチするとひんやり、ぬれタオルだ♡

「はい」

わかってるんだけどね。お店のことになると、お父さんも厳しいな。って、あはは。よく見たら、あたし足開いて壁によっかかっているよ。こりゃたしかに、お客さんには見せられないや。

「あれ？ あ、そっか」

テラスにテーブル出しながら、なんかヘンだなんて思ったんだけど、理由はすぐにわかった。テーブルがあつたかいんだ。ちよつと前まではさわつただけで熱かつたのに。もう、夏もおわりなんだよね。

いつもの場所にテーブル並べてから、あたしは真ん中にパラソルさした。そういえば、風もそんなに暑くないや。

遠くに見える海も、おおぞらの木がある山も、夏休みとはちよつと違う感じ。まだ秋までいかないけど、でも、もう夏じゃないんだ。あゝあ。

「おい、咲。焼きあがつたぞあー」

ん？ あ、いつけない！ 今日のはのんびりしてられないんだっけ！

「ごめん、お父さん！ いま取りに行くから！」

それにしても

「みのり、今ごろ頑張ってるんだろつなあ」

パンで半分隠れた窓の向こう側、すっごくいい天気。この空の下で、そろそろ走ってるころかな、みのり。

「それもだ。言わない言わない」

奥からお父さんが出てきた。タオルで汗拭いて、お店用の帽子がぶりなおしてる。

「お父さんだって、そりゃあ行きたいさ。でも、だ」

くいつ、って指を後ろに向けてる。その先はお店の入り口。ガラスの向こうに、もう人が並んでる。

「期待されちゃ、休めないだろ？」

ドア開けるお父さんの背中見てたら、また自然に息ついちゃった。

けど、今度はため息じゃないよ。

髪とめなおして、エプロンのひもも締めなおして。

さあ、始めよっか。

「いらっしやいませっ」

\*\*\*\*\*

「ありがとうございましたっ」

朝のお客さんの波が引いて、時計を見たらまだ10時前。お父さんはお昼用のパン作りはじめてるし、ちよっと休めるかな？

カランカラン

って考えてると来るんだよねえ、お客さん。

「いらっしやいま あつねえ？ ふたりとも、どうしたの？」

ドアのそこには仁美と優子が、えっ？って顔で立ってる。へんだな、たしか今日は、ふたりで買いもの行くとか言ってたっけ？

「なーによ。みのりちゃんの運動会にお母さんがお出かけで、一日中手伝いだっ！なんて言ってたの、咲じゃない」

「応援に来たのに、どしたの『はないでしょ？』」

あたし、ちょっとだけ感激しちゃったよ。やっぱり友だちだなあ、って。

でも、ふたりの服見てあっ、と思った。ま、いつか。

「じゃ、手伝ってくれるの？」

レジ前の机に手ついて、ぐいって体起こして、思いつきりにっこりして言ったら、

「それはだーめ。あたしたちにも都合、ってもんがあるんですからねー」

って仁美がおつきなバツテン作った。わかってますよーだ。それだけよそ行きの格好してんだから。

優子なんてひらひらのスカート。そんなんで手伝いできるわけないじゃん。

「そのかわり、ちゃんとお仕事がんばったら、あとで　むぐっ!!」

ひとつため息ついてる途中で仁美がなんか言ったんで顔上げたら、優子に口押さえられちゃってるよ。ん？

「いやー、あははは。まあ、そういうことで。がんばってね」

そのままお店出てっちゃうふたりの背中、あたしはただぼかーんと眺めてた。

けど、さっき、なんかへんなこと言ってたみたい。なんだったんだろ、あれ？

\*\*\*\*\*

「『手伝ってくれるの』かあ」

優子たちが帰って、イスにすわった瞬間、口からぼつん、ってこぼれちゃった。

軽く言っちゃったけど、手伝いをお願いする気なんてなかったんだよね、あたし。お昼になったら、またたいへんなんだけどさ。

長いバゲットが1本だけ入ったかご、ぼーっと見ながら、あたしはレジに頭もたれた。レジがちょっとだけひんやりして、気持ちいいな。

目を横にずらしたら、ちよつとだけ残ってるブルーにクロワツサンの棚。そこにお父さんやお母さんがいても何にも感じないんだけどね。お店でクラスの子が働いてると、まだなんとなく思い出しちゃうんだ——満と、薫をさ。

「舞にだったらお願いできるんだけど、ね」

おとといの帰り道だっけ。きょうお手伝いしなくちゃいけないから、舞にもお願いできないかな、って思ったのは。

けど、言い出す前に舞の方から話し始めたんだ。

『週末にね、となり町のデパートに化石展を見に行くの。いっしょに』

すつこく楽しそうに言ってたっけ、舞。だから、すぐわかったんだ。いっしょの相手。

——お兄さんと？

『ん。お兄ちゃんと』

ほんとに楽しそうな顔。見てるだけで、ちよつと

だけため息でちやうくらい。

『久しぶりだなあ。お兄ちゃんとデパートなんて』

あゝあ、もうほんと、にっこにこしちゃってさあ。

——デパート、そんなに久しぶり？

『最近は咲とでしょ。もちろん楽しいけど お兄ちゃんとは、また別だから』

あー、でも、なんていうか

って口もこもこしてたら、舞が顔のぞきこんで来たっけ。

『ブラコン、って言いたいんでしょう？ いいですよーだ』

——あ、えとえとあ、いやその

『ふふ。うそうそ。小学校の頃から言われつつけてるもん。もう慣れちゃった』

——あ、ああ、そうなんだ。

『やっぱりね、ちよつと違つ。お兄ちゃんとは——』

『舞もお兄さんも、大切なんだよね。あたしなんかより』

『——』

『舞もお兄さんも、大切なんだよね。あたしなんかより』

『——』

『——』

『——』

たし、なんて言った!?

ああ、な、なんかもう、じっとしてらんない!!

「お父さん、お昼のパンまだ!?!」

\*\*\*\*\*

カランカラン

お昼用のパンを取りに行ったところで、ドアの音がした。トレイ持ったまま、あわてて戻ったけど

あれ? 珍しいな。安藤さんだ。

「いらっしやい。安藤さんも、うちのお客さんだったんだ。いまちょうど焼きあがったところだから」

ん? なんだろ。メガネの中からあたしの顔、じーっと見てるな。

「安藤、さん?」

おさげの先っぽいじりながら、まだ、じーっと。よく見たら制服姿だし。なんだろ、いったい?

「やつぱり、そうよね。見間違いなのかな」

ふう、って息ひとつつきながら、安藤さんがぼそつ、って言った。

でも、見間違いつて?

「ああ、ごめんなさい、いきなり。ちょっと資料わすれて、学校に行く途中で見かけたから。てっきり、こっちかと思ってたんだけど」

んん?? 学校の近くで見て、こっち? なにそれ?

「あ、あのあ、もしもし? だれのこと、それ?」

「美翔さんよ。今日は化石展に行くって聞いてたのにまだいるんだもの。日向さんの手伝いに呼ばれたのかな、って 考えすぎだったみたいね。」

それじゃ、その焼きたて、ひとつもらえる?」

トングで焼きたてのブルつかんでから安藤さんが帰るまで、なにやったか覚えてない。目の前がなんだか暗い。頭の中、ずっとぐるぐるしてる。

舞、あたしにウソついてなにやってるんだろ? お兄さんといっしょに、どこで、なにやって

カシャーん

音と一緒に、目の前が明るくなった。棚にプール、足元にトンゲとトレイがころがってる。いっけない!!

「次のパン、焼きあがってるぞーっ、聞こえないのかーっ?」

お父さんの声がいつもより大きい。

そうだった。今はお仕事なんだ。舞のことは、考えちゃうけど 考えないっ!

「い、いま行くーっ!」

\*\*\*\*\*

「ありがとうございますっ! あ、こちらメロンパン2つですね。はい、えーと」

お昼近くから、お店はすんこい混雑。お父さんと交代でレジ打ってるけど、全然おわらないや。

運動会にお弁当忘れて、買いに来てるひとまでい

るんだもんね。これじゃいつもの日曜の方が楽かも。

それでもなんとかお客さんが少なくなってきたころ、知ってる声が聞こえてきた。

「お、働いてるねえ」

ぱつと頭上げて見てみたけど なんだ、健太か。あたしはまた、少なくなってる菓子パンの場所を移

しはじめた。健太だったら、動きながらでもいいや。

「あんたが来るなんて、珍しいじゃない。なに、パン買うの?」

ほんと、めつたに来ないのに、今日に限って来るなんてね。

あれ、までよ。そういえばさつきも珍しい人が来てたっけ。偶然かな?

「ひつでえ店員だよなあ。お客にそんなこと言うなんてよ。まったく、こんなだから、美翔が」

なに!?

「舞? 舞がどうしたの?」

気がついたらあたし、健太の腕をトングでつかんでた。うわっ、なんて言いながら腕振り回して離れたけど、逃がすもんか！

「ちよつと、健太　んぐつ！」

飛びつこうとしたあたしの首が、なんかに引つ張られた。ちらつと後ろ見たらお父さん。し、しまつたあ。

「あー、そうそう。オレ、店の手伝いしなきゃいけないだった。んじゃー！」

ドアの方に向き直ったときには、健太の駆け出す後姿だけ。あーっ！もうなによ、舞がどうしたっていうのよっ！

「こら健太っ！ちゃんと話してけっつ！！」

\*\*\*\*\*

「いつたいなあ、もう　」

外のテーブル片付けながら、あたしはまた頭さす

つた。

あのあと、お父さんからげんこつ一つもらっちゃったんだよね。そりゃ、トングでひとつかんだりしちゃまずいけどさ。

それにしても、外は静かだな。

コーヒークップをトレイに乗せてると、カチャカチャって音がなんだか声みたいだ。

お母さんもない。みのりもない。舞もない。あたしはお仕事　しかたないんだけどさ。

「舞、なにやってるんだるな　」

空に向かつて、なんとなくつぶやいちゃった。だれも答えてくれないの、わかってるんだけど。

さ、怒られないうちに、お店もどらなきゃね。

「　もうそろそろ、マズいんじゃない？あれ」

つて、トレイ持って歩きはじめた途中で、なんか小さい声が聞こえてきた。

「そんなに早く終わらないって」

近くからだけど、お店の中からじゃないな。表のほう？

そう思つてよく見てみると、頭が半分こつちに出てる。頭はひとつ いや、ふたつ。

「無理だよ。いくら舞ちゃんでも」

あたしはゆっくり深呼吸した。そおつと近づいて、トレイ足元において

「で？ 舞がいったいどうしたつて？」

お店の表からのぞいてたのは、やっぱりふたり。

「あー」

「その あはははは」

優子と仁美が、朝の格好のまんまでしゃがんでる。

あたしはふたりの腕つかまえて、

「笑つてごまかさない。どうしたのよ、舞は。まさ

かなんか悪いことでも」

「ないないない、それはないつて！」

ふたりとも腕はたばたさせてるな。けど、

「じゃあどごよ、舞はー！」

逃がすもんか。舞のこと、聞き出すまで！

「わたしなら、ここににいるけど？」

え!?

びっくりして、思わず両手離しちゃった。すぐ後ろから聞こえてきた声。きょう、一番聞きたかった声！

「舞ちゃん!？」

「ちよ、ちよつと。もう大丈夫なの？ まだ6時間も経つてないよ？」

振り向きかけたあたしの体が、途中で止まった。

6時間？ 大丈夫？ それつて、まさか！

「ふたりとも、なんか隠してたわねえっ！」

「咲、ストロップ!!」

な、なに？ 後ろから、舞が抱きついてきた!?

「みんな、悪いんだけど いい？」

背中からの言葉に、目の前のふたりがうなずいた。『じゃあ、よろしく』なんて言つて、そのまま帰つ



てく。

あたしはその間、ずっと背中感じたしかめてた。舞が、そこにいるのを。

\*\*\*\*\*

「咲？」

「ふたりに見えなくなつてから、舞がおなかから手を離れた。

「な、なによ」

「げんこつ、落としていい？」

え？

「一日中お手伝いなんて、なんで言ってくれなかったの？ わたし、そんなに頼りにならない？」

な、な

「なんでよ！ もともと、舞がきょう出かけると言つたからじゃない！ ジャマするなんて出来るわけないでしょ、舞は大好きなお兄さんとデートなん

だからっ!!」

しまった！ って思つて口に手あてたけど、遅かつた。こんなイヤミ、言つつもりじゃ

けど、舞はにっこり笑つてた。

「楽しかつたわ、お兄ちゃんとデート。普通の人が2時間かけて見る化石展を、15分で回つちやつたんだもの。」

ええっ!?! それじゃ、見たことにならないんじや

「化石展に行く途中で仁美ちゃんたちに会つてね、咲のお手伝いの話を聞いたの。わたしすぐお店に行こうとしたのよ。でも、お兄ちゃんが止めたの——咲のためにわたしは何かあきらめたら、咲は絶対に喜ばないって。

だから、15分。一所懸命に見たのよ。わたしも、お兄ちゃんもね。なんの うっん、だれのためか、言わないとわからない？」

え あ ああ うん。

顔が熱くなつてるの、自分でわかる。もう、そん

なこと言われちゃ、うなずくしかないじゃないさ。

「じゃ、おみやげあげる」

ん？

舞が背中から大事そうに取り出したけど、なんだ  
いつものスケッチブックじゃん。それがいい

え!?

「はい、どうぞ♡」

ぱっと開いたスケッチブックの中で、みのりが走っ  
てた。

半分目をつむって、前に倒れるくらいちからいっ  
ぱい。土ぼこりたてながら、となりの男の子を追い  
抜いて

「みのりちゃんも言ってたわよ。走ってるって、咲  
に見てほしいって」

あ あはは。

みんないないなんて、なんで思ったんだろ。そ  
ばにいるじゃん。舞も、みのりも、舞のお兄さんま  
で♡

「おーい、咲。片付けまだかーっ!？」

お父さんもいる。怒鳴り声なのに、いまはなんか  
違って聞こえるよ。それじゃ、お仕事再開しようか。

「また、ひとりで行くの?」

行こうとしたあたしに、舞が声かけてきた。

あらためてまっすぐ見てみたら、動き易いシャツ  
に、パンツ姿の舞 いっけない。

あたしは思いつきり息吸ってから、勢いつけて頭  
さげた。

「お願い。手伝って、舞♡」

—おしまい—